

「福島をどこよりも希望あふれる場所」にしたい中高生の望み

「福島民報」2014年9月1日と2日にわたって、パリで開催された東北復興祭で「福島復興大使」として派遣された福島県内の中高生の記事が掲載されていた。そこには次のようなことが書かれていた。派遣された中高生は自分たちも未来をどのように切り開いていくか、東日本大震災や東京電力福島第一原発からの復興に向けてのメッセージを発信した。自分たちはあの避難生活の中で笑顔に励まされたことを想い、笑顔こそが復興を支えるものであり、福島県を自分たちから、世界中のどこよりも希望であふれる場所にしたいと語った。それに対して、温かい励ましの拍手が送られた。復興祭の会場の高校生らのブースにはパリ市長も訪れ、生徒たちの辛い体験や、そこからどのように彼らが前に進んできたかに耳を傾け、中高生らの姿に市長も感激したと書かれていた。

若者

「福島民報」8月26日付の新聞には、相馬と双葉（相双地区）の高校生らの話が載っていた。そこには、若者が、自分たちが地域再生のために何ができるかを模索している様子が書かれていた。福島第一原発事故後の風評被害はまだ払拭されてはいない。そこで、どのようにしたらこの風評被害を取り除くことが出来るかを考え、自分で古里の逸品を見つけて、全国に発信して、届けようと「そうまうま定期便」というものを始める企画をした。逸品の一つとして選んだ、被災から立ち上がり2013年7月に再開した南相馬市鹿島区の「松月堂」を取材した。店再開までの苦労を取材してDVDを作り届ける計画もしているという。

広島平和式典に参列した小学生

8月31日の「福島民報」には、小学生が広島平和記念式典に参加した記事が掲載されていた。式典に参加したのは、桑折町の小6年生4人だ。かれらは、非核平和都市宣言をしている桑折町によって派遣された。桑折町に帰ってきた4人は、町長を訪問して、「核兵器を亡くし平和な世界を作らないといけない」「いのちを粗末にするようなことはしないと心に決めた」「戦争をすると人はくるってしまうのだと思った」「原爆で今も苦しんでいる人がいることに驚かされた」などの感想を報告した。それに対して町長は生徒たちの感想に声を詰ませ、生徒たちの感想に感動したことを生徒たちに語り、感じ取ったことをこれから的人生の中で生かしていってほしいと期待を託した。生徒たちがいのちの大切さを深めていくことを願う。

仮設住宅／復興住宅

新聞で飯館村復興住宅「飯野町団地」の完成記事を目にした。そこには飯館村の村立幼稚園児が復興住宅の敷地内で完成祝いの太鼓演奏の写真が載っていた。それで、この「飯野町団地」を実際に訪ねてみた。訪ねてみて、新聞に出ていた写真が思い出された。その写真は、3人の子どもを育てている飯野町団地の自治会長に村長から鍵が渡された写真だった。「飯野町団地」は子どもを持つ家族用に作られたという。小さな子どもがのびのびと育つことが出来るような環境が整備されていた。飯館村は南相馬市に合併する道を選ばず、独自に自然との調和を求めて、村全体としてユニークな取り組みをしていた村だった。その村は風向きと地形のために





放射能が滞留した場所となり、全村避難を余儀なくされた村だ。飯野町に土地を得て、安全、安心をもとに子どもたちを育てることが出来る村立の災害復興住宅が完成した。落ち着いた環境が住居、集会所を囲んで一つのコミュニティとなれるように考えられていた。

原発労働者

「福島民報」8月27日の小さな記事が気になった。そこには、除染労災事故隠しが載っていた。いわき区検察庁が除染を受注した業者が葛尾村で除染作業をしていた男性が梯子から落下して、あばら骨などを折る大けがをしたのに、労災申請をしなかったことに対して、いわき簡裁に略式命令を請求しているというものだった。しかし、簡裁は26日現在、処分を出してはいないという。

原発作業員ら、危険手当求め東電などを提訴

福島第一原発の作業員らが「危険手当」の支払いを求めて、東京電力などを提訴した。原発作業員に渡されるはずの金額が中抜きをされていることは以前から耳にしていることだった。今回の報道によって耳にしていることが本当だと知った。福島第一原発で事故処理を行う作業員と元作業員の4人の訴えは、被ばくの危険に対して東京電力が支払っているはずの「危険手当」が現場の作業員にほとんど届いておらず、工事を受注した会社が中間搾取しているとして、東京電力と受注会社にあわせて約6200万円の支払いを求め裁判を起こしたというものだ。元作業員（66）は「放射能浴びて危険な目にあっているのに、そのための手当なのに、どうして本人に行き渡らず途中で抜いちゃうのかと。」（「NNN」9月4日）彼らは、「裁判で多重下請けによるピンハネの構造を明らかにし、危険手当が末端の作業員に行き渡るようにしてほしい」（同上）と訴えているという。

「規制解除になった国道6号線」を走る

9月15日、国道6号線が3年ぶりに規制解除になり、南相馬市の原町ベースからいわき市のもみの木サポートステーションに容易に行けるようになった。東京から視察に来た友人とこの道を通った。「ここからは入れなかったのよね」といいながら、「立入禁止」の看板があったあたりを通り抜けた。



どのあたりが福島第一原発？と放射線線量計とにらめっこしながら、遠目に1F（イチエフ・福島第一原発）が見えないか目を凝らした。線量計が高い値を示す。鉄塔が一列に並び、高圧電線が延びている。遠くにクレーン車のアームが…「あのあたりかな？！」。

カナダからのたより

「福島デスク・ニュース」をありがとうございました。カナダにおいて、今まで大体の状況しかつかめませんでした。今も、日本の方々が何か大変な体験をしておられるということしか分かっていないとは思うのですが、このすばらしい共同体の繋がりの中に、私たちの兄弟姉妹を感じることができ、感謝しています。自分のいる所からは何も役に立つことができない、と思った時でも、苦しんでいる方々の話を誠心誠意聴くことで、その方たちへの敬意を表すことができる、と書いたものを読んだことがあります。私にも、及ばずながらそれをさせてください。この新聞を発行してくださる方々に、よろしく。また、次を読ませてください。お互いに、勇気を出して旅を続けましょうね。オタワにて、バーニー。